

日本の小型鯨類調査・研究についての進捗報告
2007年4月から2008年3月まで（統計データは2007暦年）

とりまとめ

岩崎俊秀

独立行政法人水産総合研究センター遠洋水産研究所
〒236-8648 神奈川県横浜市金沢区福浦 2-12-4 中央水産研究所駐在

本報告は、2007年の小型鯨類漁業及び2007年4月から2008年3月までの期間の遠洋水産研究所（以下、遠洋水研）及び日本国農林水産省水産庁（以下、水産庁）が他の機関と協力して実施した調査・研究を取り纏めたものである。本報告は、第60回国際捕鯨委員会科学委員会会合（以下、IWC/SC）に提出した“Japan. Progress report on cetacean research, April 2007 to March 2008, with statistical data for the calendar year 2007”に取り込まれなかった小型鯨類についての情報を含んでいる。

1. 対象とした種及び系群

遠洋水研及び水産庁は次のような種及び系群の小型鯨類を調査・研究した。

標準和名	学名	海域/系群	関係する項目
イシイルカ	<i>Phocoenoides dalli</i>	太平洋沿岸、オホーツク海、日本海	4.2、6.1、6.2.1、9.、10.1、10.2
ネズミイルカ	<i>Phocoena phocoena</i>	日本沿岸	6.2.1、6.2.3
スナメリ	<i>Neophocaena phocaenoides</i>	日本沿岸	2.1.1、4.2、4.3、6.2.1、6.2.3、10.1
カマイルカ	<i>Lagenorhynchus obliquidens</i>	太平洋沿岸	4.2、4.3、6.2.1、6.2.3、10.1、10.2
スジイルカ	<i>Stenella coeruleoalba</i>	西部北太平洋	4.1、4.2、4.4、6.1、6.2.1、10.1、10.2
マダライルカ	<i>Stenella attenuata</i>	太平洋沿岸	4.1、4.2、6.1、6.2.1、10.1、10.2
ハンドウイルカ	<i>Tursiops truncatus</i>	太平洋沿岸、東シナ海	2.1.1、4.1、4.2、5.、6.1、6.2.1、6.2.3、10.1、10.2
ハナゴンドウ	<i>Grampus griseus</i>	太平洋沿岸	2.1.1、4.2、5.、6.1、6.2.1、6.2.3、10.1、10.2
コビレゴンドウ	<i>Globicephala macrorhynchus</i>	西部北太平洋、東シナ海	2.1.1、4.2、4.4、5.、6.1、6.2.1、10.1、

			10.2
オキゴンドウ	<i>Pseudorca crassidens</i>	太平洋沿岸	4.2、6.1、 10.1、10.2
シャチ	<i>Orcinus orca</i>	日本沿岸、南極海	4.1、10.1、 10.2
ツチクジラ	<i>Berardius bairdii</i>	太平洋沿岸、日本海、 オホーツク海	2.1.1、 3.1.3、3.2、 4.2、4.4、 6.1、6.2.1、 10.1、10.2
いるか漁業又は小型 捕鯨業操業中に捕獲 又は発見されたその 他の種類	-	太平洋沿岸、日本海、 オホーツク海	2.1.2、6.2.3
目視調査中に発見さ れたその他の種類	-	西部北太平洋、オホー ツク海、南半球	2.1.1
座礁・漂着したその他 の種類	-	日本周囲	6.2.1

2. 目視データ（このセクションは SC/60/Japan /Progrep. の目視データのセクションの記述と一部重複する）

2.1 フィールドワーク

2.1.1 組織的調査

遠洋水研及び水産庁は、北太平洋において調査船による目視調査および関連調査を調査船によって6件、航空機によって1件実施した。全ての調査船は鯨類観察台（トップバレル）を装備している。これらの航海において小型鯨類を含む全ての目視情報を記録した。

表1 2007年4月から2008年3月までに調査船による目視調査で得られた小型鯨類の発見

対象種	期間	海域	発見 群数	担当者（担当機関）および文献
ツチクジラ	14/06/07-25/07/07	日本海	91	南川真吾（遠洋水研）
北方型コビレ ゴンドウ （タツパナガ）	15/09/07-14/10/07	西部北太平洋	16	宮下富夫
南方型コビレ ゴンドウ （マゴンドウ）	24/07/07-13/9/07	西部北太平洋	8	島田裕之
ハンドウ イルカ	24/07/07-13/9/07	西部北太平洋	5	島田裕之
	28/07/07-09/9/07	西部北太平洋	1	島田裕之
	30/07/07-13/9/07	西部北太平洋	3	島田裕之

遠洋水研、高知県及び土佐湾ホエールウォッチング推進協議会（以下、協議会）の共同調査として、協議会に所属する30隻のホエールウォッチング船を用いて、2006年7月と8月に土佐湾西部沿岸域においてニタリクジラの目視調査が実施された。これらの船（5-10トン）は、専用の観察台（top barrel）を持たず上表には示されていないが、沿岸域での目視調査に使用された。調査は7月と8月に各5日間行われ、木白（遠洋水研）と10名の補助調査員及び延べ30名の漁業者（協議会メンバー）が乗船調査員を務めた。調査中にマイルカ属鯨類14群（1,132頭）、ハナゴンドウ3群（60頭）、ハンドウイルカ2群（80頭）を記録した。

スナメリの資源量と分布に関する情報を得るため、西九州の有明海・橘湾と大村湾において航空目視調査を実施した（使用機材：セスナ172P型小型飛行機）。吉田が東京海洋大学、長崎県水産部とともに調査を行った。2007年11月8-9日の2日間に計366.5海里を探索し、50群99頭のスナメリを発見した。他にミナミハンドウイルカ2群約180頭の二次発見があった。

2.1.2 組織的調査以外の目視データ

小型捕鯨業といるか漁業において、漁場内における主として対象種の発見に関する情報を操業船から収集した(例えば太地沖では、オキゴンドウ、マゴンドウ、ハナゴンドウ、スジイルカ及びマダライルカ)。

3. 標識データ

3.1 フィールドワーク

3.1.1 自然標識データ

小型鯨類については、2007年4月から2008年3月までに自然標識データは得られていない。

3.1.2 人工標識データ

小型鯨類については、2007年4月から2008年3月までに人工標識データは得られていない。

3.1.3 テレメトリーデータ

南川及び川島(水研センター)は6月から7月に日本海において空気銃を用いてタグ(深度・温度のデータロガーとアルゴス送信機を内蔵し、先端に鉈先を備える)を10頭のツチクジラに装着した。これらのタグは一定時間後にクジラから切離され、6台を回収した。このうち4台からデータの収集に成功し、約15時間から約38時間の潜水深度時系列データを得た。

3.2 解析及び技術開発

南川は、空気銃を用いたツチクジラへのデータロガー装着システムにさらに改良を施した。このシステムはツチクジラの潜水行動データの取得に使用された。

4. 収集した組織・生物学的試料

4.1 バイオプシーサンプル

表2 2007年4月から2008年3月までに得られた小型鯨類のバイオプシー試料

種類	海域/系群	期中の試料数	保管(Y/N)	分析試料数	保管試料数	照会先
スジイルカ	北太平洋	2	Y	0	2	遠洋水研
マダライルカ	北太平洋	2	Y	0	2	遠洋水研
ハンドウイルカ	北太平洋	1	Y	0	1	遠洋水研
シャチ	南極海	1	Y	0	1	遠洋水研

4.2 漁獲又は混獲に由来するサンプル

表3 2007年4月から2008年3月までに得られた漁獲試料及び混獲試料

種類	海域	組織の種類	個体数	保管(Y/N)	連絡先
イシイルカ イシイルカ型	北太平洋	皮膚(Sk)、 筋肉(Mu)	7	Y	遠洋水研
スジイルカ	北太平洋	下顎歯 (To)、乳 腺(Ma)、 卵巣(O)、 子宮角 (U)、精 巣(Te)、 Sk、Mu	463	Y	遠洋水研
マダライル カ	北太平洋	To、Ma、O、 U、Te、Sk、 Mu	13	Y	遠洋水研
ハンドウイ ルカ	北太平洋	To、Ma、O、 U、Te、Sk、 Mu	276	Y	遠洋水研

	東シナ海	To、Sk、 Mu	2	Y	遠洋水研
ハナゴンドウ	北太平洋	To、Ma、O、 U、Te、精 巢上体 (E)、脊椎 骨(V)、Sk、 Mu、肝臓 (L)	299	Y	遠洋水研
コビレ マゴン ゴンドウ ドウ	北太平洋	To、Ma、O、 U、Te、E、 V、Sk、Mu、 L	92	Y	遠洋水研
	東シナ海	To、Sk、 Mu	64	Y	遠洋水研
オキ ゴンドウ	東シナ海	To、Sk、 Mu	3	Y	遠洋水研
カマイルカ	北太平洋	To、Ma、O、 U、Sk、Mu	17	Y	遠洋水研
ツチクジラ	北太平洋	To、Ma、O、 U、Te、E、 V、Sk、Mu、 L	53	Y	遠洋水研
ツチクジラ	オホーツ ク海	To、Ma、O、 U、Te、E、 V、Sk、Mu、 L	4	Y	遠洋水研
ツチクジラ	日本海	To、Ma、O、 U、Te、E、 V、Sk、Mu、 L	10	Y	遠洋水研
スナメリ	東シナ海	Sk	5	Y	遠洋水研

小型捕鯨業におけるツチクジラの年間捕獲枠は67頭(昨年度の取り残し1頭分の繰越しを含む)であり、操業期間は、日本海側沿岸で函館を基地として5月25日から6月30日まで、太平洋側沿岸で鮎川と和田浦を基地とし、各々6月20日から8月31日まで、オホーツク海側沿岸で網走を基地とし8月20日から9月5日までが許可された。合計67頭(函館沖10頭、網走沖4頭、鮎川和田浦沖53頭)が、5隻の捕鯨船(正和丸、第75幸栄丸、第28大勝丸、第7勝丸、第31純友丸)によって捕獲された。本漁業からのフィールドデータ収集は木白が組織し、5名の調査員(木白、盛田(水産庁)、豊田(水産庁)、原(水産庁)、田端(水産庁)が全捕獲物について生物調査と試料採取を行なった。北方型コビレゴンドウ(タツバナガ)の捕獲枠は36頭であり、鮎川を基地とした2隻の捕鯨船(第75幸栄丸、第28大勝丸)に対しツチクジラの操業期間中(6月20日から8月31日)に捕獲が許可されたが、捕獲はされなかった。南方型コビレゴンドウ(マゴンドウ)についての小型捕鯨の捕獲枠も36頭であり、操業期間は5月1日から8月15日及び9月1日から9月30日まで許可された。合計16頭が3隻の捕鯨船(第7勝丸、第31純友丸、正和丸)によって捕獲され、捕鯨基地(太地)に水揚げされた。全捕獲物について、原(水産庁)、盛田(水産庁)、川島(水産庁)が調査し試料採取した。さらに水産庁は太地沖の5月1日から8月15日及び9月1日から9月30日までの小型捕鯨操業にハナゴンドウ20頭の捕獲枠を設定した。合計20頭を正和丸が捕獲し、原、盛田、川島が調査した。2007年5-8月の太地においては、調査員は機会があれば突きん棒漁業の漁獲物も調査し、ハンドウイルカ49頭、ハナゴンドウ77頭、マダライルカ13頭、スジイルカ13頭から試料採取を行った。

木白と盛田は、2007年5月から6月に函館の小型捕鯨によって捕獲されたツチクジラ10頭の胃内容物を記録した。

岩崎と同僚(原(水研センター)及び富澤(水研センター))は、2007年12月1-25日まで及び2008年1月7日から2月28日までの太地の追い込み漁業及び突きん棒漁業の漁獲物から生活史及び系群の研究に用いる試料を採取した。彼らはスジイルカ450頭、ハンドウイルカ193頭、ハナゴンドウ166頭、カマイルカ17

頭及びマゴンドウ 16 頭の合計 842 頭を調査した。岩崎と富澤は、2007 年 10 月北海道広尾沖においてイシイルカ型イシイルカの胃内容物と関連データ・試料を集めようとしたが、採取の機会がなかった。

遠洋水研の指導の下、水研センターとの契約に基づき岩手県において生活史及び系群の研究用試料採取が行なわれた。2007 年 4 月から 2008 年 3 月の期間、大友は原、佐藤及び大友（以上、岩手県水産技術センター）とともに釜石魚市場に水揚げされたイシイルカのうちリクゼンイルカ型 515 頭、イシイルカ型 460 頭の体色型、性別、体長を記録し、イシイルカ型イシイルカ 7 頭の DNA 試料を採取した。

沖縄県庁は、漁業者への指導監督の一環として 2007 年 2-10 月の石弓漁獲物マゴンドウ 64 頭及びオキゴンドウ 3 頭の歯と DNA 試料を集め、2008 年 3 月に遠洋水研に送った。2007 年 12 月および 2008 年 2-3 月に長崎県で混獲されたスナメリ計 5 頭の皮膚試料が遠洋水産研究所に提供された。

4.3 座礁・漂着に由来するサンプル

漂着したスナメリ 15 頭（長崎県 4 頭、熊本県 2 頭、福岡県 1 頭、茨城県 7 頭、宮城県 1 頭）及びカマイルカ 1 頭（2008 年 3 月、神奈川県）の皮膚試料が遠洋水産研究所に提供された。

4.4 解析及び技術開発

日本海のツチクジラの系群構造を解明するために、木白と豊田は 2007 年に小型捕鯨によって函館で捕獲されたツチクジラの年齢、生殖器官の分析を続行した。

遠洋水研は東海大学海洋学部と小型歯鯨類の食性に関する委託及び共同研究を継続した。大泉（東海大）は 2007 年 5 月から 6 月に函館の小型捕鯨業で得られたツチクジラ 10 頭の胃内容物について盛田が記録した餌種の観察記録を分析し、2006 年以前の共同研究で得られていた函館操業のツチクジラ胃内容物分析結果と比較した。

吉田は、コビレゴンドウの系群構造解明のため、2006 年に石弓漁業で得られた 31 個体を加えさらなる遺伝子組成分析を進めた。また、スジイルカの系群構造解明を目的に、1993 年にバイオプシー採取により得られた 15 個体分の試料ならびに 1995 年に突棒漁業により得られた 31 個体分の試料を加え遺伝子組成分析を実施した。

岡村らはベイズ法に基づくシミュレーションモデルを用いて PBR 等の管理手法の効果を検討した。金治、岡村及び宮下は 2006-2007 年の目視調査データを用いて北方型コビレゴンドウ資源量推定に関する予備的研究を実施した。

5. 小型鯨類の統計

5.1 2007 年 1-12 月の捕獲

表 4 2007 年の小型鯨類捕獲統計

種類	漁業種	都道府県 ¹⁾	頭数 ²⁾
イシイルカ型イシイルカ	突きん棒	北海道	841
		岩手県 ³⁾	2,975
		宮城県	254
リクゼンイルカ型イシイルカ	突きん棒	北海道	44
	突きん棒	岩手県	7,243
スジイルカ	突きん棒	和歌山県	86
	追い込み	和歌山県	384
マダライルカ	突きん棒	和歌山県	16
ハンドウイルカ	突きん棒	和歌山県	97
	追い込み	和歌山県	300(77)
	突きん棒	沖縄県	4
ハナゴンドウ	小型捕鯨	和歌山県	20
	突きん棒	和歌山県	185
	追い込み	和歌山県	312(8)
マゴンドウ	小型捕鯨	和歌山県	16
	突きん棒	沖縄県	79
	追い込み	和歌山県	243(5)
オキゴンドウ	突きん棒	沖縄県	4

ツチクジラ	小型捕鯨	北海道	14
	小型捕鯨	宮城県	27
	小型捕鯨	千葉県	26

- 1) 小型捕鯨及び追い込みによる捕獲は水揚げ地に記録されている。また突きん棒の捕獲は、船籍地に記録されている。
- 2) 小型捕鯨の統計は、調査員及び漁業者の報告に基づいている。他の漁業の統計は、都道府県から水産庁への報告に基づいており、それらの報告は水揚げ伝票の集計（北海道及び岩手県の突きん棒）あるいは個々の漁業者あるいは漁業協同組合からの報告の集計（他の都道府県）である。カッコ内は生体捕獲(内数)を示す。北海道沿岸における突きん棒漁獲物の一部は漁業者によって正肉として水揚げされ、50kgを1頭とする比率を用いて道県によってイシイルカ型イシイルカの頭数に換算されている(石川ら 1990)。

小型捕鯨業の対象種、漁期、捕鯨船、捕獲枠及び実際の捕獲頭数は、4.2.に示した通り。いるか漁業については、第52回IWC/SCに提出したプログレスリポートに説明してあるように水産庁は1996年に、イシイルカは8月1日に開始し翌年7月31日終了、他の鯨種は10月1日に開始し翌年9月30日に終了する新しい管理期間を導入した。2006年、水産庁は上記の管理期間を改め、和歌山県の漁業について9月1日から翌年8月31日とした。これは同県の追い込み漁業の漁期に9月が追加されたからである。しかしながらこれまで同様にIWCのプログレスリポートガイドラインに則り、捕獲統計は2007年1月1日から12月31日までを対象とする。なお、水産庁のいるか漁業の管理期間は上述の通りなので、暦年の捕獲頭数が見かけ上捕獲枠を超過しているケースがあるかもしれないが、管理期間内の捕獲は捕獲枠内に留まる。こうした小型鯨類の漁獲は、都道府県別、漁業種別に表に示してある。また統計データは各都道府県庁の報告に基づいて水産庁遠洋課が集めた。

2007/2008年漁期については、いるか漁業捕獲枠は前漁期から変更され、イシイルカ型イシイルカ8,708頭、リクゼンイルカ型イシイルカ8,168頭、ハナゴンドウ541頭、ハンドウイルカ1,018頭、マダライルカ879頭、スジイルカ685頭、マゴンドウ369頭及びオキゴンドウ100頭である。

2007年の県別操業期間は次の通りである。いるか突きん棒漁業は沖縄県で9ヶ月(2月1日から10月31日まで)、和歌山県で8ヶ月(1月1日から8月31日まで)、青森県、宮城県、岩手県及び千葉県では6ヶ月(1月1日から4月30日まで及び11月1日から12月31日まで)、北海道では4.5ヶ月(5月1日から6月15日まで及び8月1日から10月31日まで)であった。いるか追い込み漁業については、和歌山県が1月1日から4月30日まで及び9月1日から12月31日までの8ヶ月であり、静岡県が1月1日から3月31日まで及び9月1日から12月31日までの7ヶ月であった。

5.2 2007年1-12月の非自然死亡

5.2.1 座礁・漂着した小型鯨類

表5 2007年の小型鯨類座礁・漂着統計

種類・系群	頭数	死亡	連絡先
イシイルカ型イシイルカ	5	5	水産庁
ネズミイルカ	6	6	水産庁
スナメリ	117	117	水産庁
マイルカ	2	2	水産庁
カマイルカ	9	9	水産庁
マダライルカ	2	1	水産庁
スジイルカ	5	5	水産庁
ハンドウイルカ	5	5	水産庁
ハナゴンドウ	10	10	水産庁
サラワクイルカ	1	1	水産庁
シワハイルカ	2	2	水産庁
カズハゴンドウ	2	2	水産庁
マゴンドウ	1	1	水産庁
ツチクジラ	4	4	水産庁
オウギハクジラ	5	5	水産庁
コマッコウ	3	3	水産庁

オガワコマッコウ	5	4	水産庁
種不明鯨類	18	18	水産庁

種類及び頭数は都道府県が水産庁に報告したものであり、漁業者、漁業協同組合および一般からの報告に基づいている。表中のオガワコマッコウ 1 頭及びマダライルカ 1 頭は救助され、水族館に運ばれた。表以外に、カズハゴンドウ 2 頭及びオガワコマッコウ 2 頭が漂着もしくは港内に迷入したが、海に戻された。

5.2.2 船舶との衝突

2007 年に小型鯨類と船舶の衝突事例についての情報は得られていない。

5.2.3 漁業による混獲

表 6 2007 年の小型鯨類混獲統計

種類	頭数 ¹⁾	都道府県 ²⁾	結果	漁獲対象種	漁業種
ネズミイルカ	2	北海道	標本保管	不明	定置網
ネズミイルカ	4	北海道	標本保管	不明	刺し網
ネズミイルカ	1	千葉県	標本保管	不明	定置網
スナメリ	1	宮城県	標本保管	不明	刺し網
スナメリ	2	愛知県	埋却・焼却	不明	刺し網
スナメリ	1	愛知県	標本保管	不明	刺し網
スナメリ	2	山口県	標本保管	不明	刺し網
スナメリ	4	福岡県	水族館（生体）	不明	刺し網
スナメリ	1	長崎県	標本保管	不明	定置網
スナメリ	1	長崎県	標本保管	不明	刺し網
スナメリ	1	大分県	標本保管	不明	定置網
スナメリ	1	大分県	標本保管	不明	刺し網
カマイルカ	18	岩手県	放流	不明	定置網
カマイルカ	17	石川県	水族館（生体）	不明	定置網
カマイルカ	3	京都府	水族館（生体）	不明	定置網
ハンドウイルカ	3	石川県	水族館（生体）	不明	定置網
ミナミハンドウイルカ	1	千葉県	水族館（生体）	不明	定置網
ハナゴンドウ	1	新潟県	食用	不明	定置網
ハナゴンドウ	1	静岡県	水族館（生体）	不明	定置網

1) 漁具のある都道府県において記録した。

5.3 過去の統計

過去の統計の修正はない。

6. 座礁・漂着

座礁・漂着した鯨類の情報は公式に水産庁遠洋課（100-8907 東京都千代田区霞が関 1-2-1）が収集した（表 9）。また、日鯨研（104-0055 東京都中央区豊海 4-18 東京水産ビル）及び山田（169-0073 東京都新宿区百人町 3-23-1 国立科学博物館）も自主的に座礁漂着に関連した情報を収集している。

7. 小型鯨類についてのその他の研究・分析

対象期間に該当機関によって上記以外の小型鯨類研究はなされていない。

8. 引用文献

石川創、藤瀬良弘、斎野重夫、銭谷亮子 1990. III. オホーツク海及び三陸沖海域での突きん棒船乗船調査 53-78. 平成元年度日本周辺イルカ生物調査報告書、財団法人日本鯨類研究所

9. 論文公表

9.1 公表済みあるいは印刷中の論文

- 岩崎俊秀 2008. 小型鯨類の漁業と資源調査 (総説) p353-7. In 岩藤健弘編 *国際資源の現況* 水産庁・水産総合研究センター 533pp. http://kokushi.job.affrc.go.jp/H19/H19/H19_45.pdf
- 岩崎俊秀 2008. イシイルカ p.358-64. In 岩藤健弘編 *国際資源の現況* 水産庁・水産総合研究センター 533pp. http://kokushi.job.affrc.go.jp/H19/H19/H19_46.pdf
- Kishiro, T. 2007. Geographical variations in the external body proportions of Baird's beaked whale (*Berardius bairdii*) off Japan. *J. CETACEAN RES. MANAGE.* 9(2):89-93.
- 木白俊哉 2008. ツチクジラ p365-70. In 岩藤健弘編 *国際資源の現況* 水産庁・水産総合研究センター 533pp. http://kokushi.job.affrc.go.jp/H19/H19/H19_47.pdf.
- 香山 薫, 米崎史郎. 2007. 飼育下マイルカ科鯨類及びキタオットセイの血液凝固に関する測定値. *哺乳類科学*, 47 (2): 221-225.
- Minamikawa, S., Iwasaki, T. and Kishiro, T. 2007. Diving behavior of a Baird's beaked whale, *Berardius bairdii*, in the slope water region of the western North Pacific: first dive records using a data logger. *Fish. Oceanogr.* 16 (6): 573-577
- 宮下富夫 2008. シャチ p404-6 In 岩藤健弘編 *国際資源の現況* 水産庁・水産総合研究センター 533pp. http://kokushi.job.affrc.go.jp/H19/H19/H19_54.pdf
- Suzuki, M., Endo, N., Nakano, Y., Kato, H., Kishiro, T. and Asahina, K. 2008. Localization of aquaporin-2, renal morphology and urine composition in the bottlenose dolphin and the Baird's beaked whale. *J. Comp. Physiol. B.* 178:149-156.
- 吉田英可 2008. スナメリ p398-404. In 岩藤健弘編 *国際資源の現況* 水産庁・水産総合研究センター 533pp. http://kokushi.job.affrc.go.jp/H19/H19/H19_53.pdf

9.2 未公表の論文

- 岩崎俊秀 2007 我が国周辺海域のイルカの資源動向、生態、漁業被害 キンメダイワークショップ要旨 2007年9月20日 高知市 (著者より提供可能)
- 岩崎俊秀 2007 小型鯨類の分布回遊一衛星追跡、標識再捕、目視データを駆使して イルカと鯨のシンポジウム要旨 長崎市. (著者より提供可能)
- 岩崎俊秀 2007 小型鯨類の摂餌生態 2007年度水産海洋学会研究発表大会講演要旨集 p84.
- 岩崎俊秀 2007 シャチの資源生態と漁獲の歴史 「シンポジウムシャチの現状と繁殖研究に向けて」プログラム・講演要旨集 p3.
- 岩崎俊秀 2008 小型鯨類漁業の現状と管理 平成20年度日本水産学会春季大会講演要旨集 p355.
- 金治佑・岡村寛・宮下富夫 2008 三陸・道南沖におけるタツパナガの個体数と分布 平成20年度日本水産学会春季大会講演要旨集 p.6
- 木白俊哉 2008 我が国沿岸における小型歯鯨類の生物学的特性値—ハナゴンドウを中心に— 平成20年度日本水産学会春季大会 シンポジウム「海洋高次捕食者の保全と持続的利用—トップダウンアプローチ:マグロ類、サメ類、イルカ類を例として—」講演要旨集 p349.
- 北夕紀・渡邊舞・田中歩・大泉宏・椎名隆・猪子英俊・岩崎俊秀・田中彰 2007 集団遺伝学的方法によるハンドウイルカ1群内の親子関係の解析 第30回日本分子生物学会年会・第80回日本生化学会大会合同大会講演要旨 p273.
- 南川真吾・島田裕之・宮下富夫・諸貫秀樹 2007 1998-2001年の目視調査データによる鯨類漁業対象6種の資源量推定 平成19年度日本水産学会秋季大会講演要旨集 p. 151
- 南川真吾 2007 「鯨類の潜水行動を探る—マイクロデータロガーによる研究」 第5回 サテライトシンポジウム 鯨類—その見えない神秘を探る 講演要旨集 p. 4
- 宮下富夫 2007 北太平洋における鯨類の現状と管理 イルカと鯨のシンポジウム要旨 長崎市. (著者より提供可能)
- 宮下富夫 2007 シャチの日本近海におけるシャチ資源の動向 「シンポジウムシャチの現状と繁殖研究に向けて」プログラム・講演要旨集 p3
- 宮下富夫・岩崎俊秀・諸貫秀樹, 1992-96年の目視調査データを用いた日本周辺のカマイルカの資源量推定. 日本哺乳類学会平成19年度大会講演要旨集, p56.
- 宮下富夫・岩崎俊秀・諸貫秀樹, 北西太平洋におけるイシイルカの資源量推定. 平成19年度日本水産学会秋季大会講演要旨集, p164.
- 大泉宏 2008 「小型歯鯨類の採餌特性」 2008 (平成20)年度日本水産学会春季大会講演要旨集 p352
- 岡村 寛 2007 小型鯨類の管理方法の検討. 東京大学海洋研究所共同利用研究集会「シミュレーションを用いた水産資源の管理—不確実性への挑戦—」, p14-19.

- 岡村 寛・岩崎俊秀・宮下富夫 2007 シミュレーションモデルによる小型鯨類捕獲の影響評価. 平成 19 年度日本水産学会秋季大会講演要旨集, p152. (ポスター)
- 鈴木美和・岩崎俊秀 2008 バンドウイルカ *Tursiops truncatus* 主胃におけるアクアポリン 2 の発現分布 平成 20 年度日本水産学会春季大会講演要旨
- 吉田英可 2007 長崎のじげもんイルカ—特にスナメリについて— イルカと鯨のシンポジウム 長崎市.
- 吉田英可 2008 日本におけるスナメリの系群構造 2007年度勇魚会シンポジウム 三重県津市.